

## 池田思想研究と信仰

勘 坂 純 市

池田大作の思想を研究することは、自身の人生と向きあうことである。今回、『池田思想研究への道』<sup>(1)</sup>に小稿を寄せさせていただき、その思いを強くした。

私は、4歳のときに母とともに創価学会に入会し、以来いわゆる「学会の家」で育ってきた。そのなかで私は、多くの創価学会員がそうであるように、池田の一つひとつの言葉に苦しい日々を乗り越える力を得てきた。高校時代の大きな挫折の中で、心が折れそうになるとき、私を支えてくれたのも、次の池田の詩「少年」の一節だった。

どんなに屹り立った岩に行き逢っても  
挫折などという言葉で  
甘美に 自分を慰めてはならない  
ただ一人 渾身の力で 現実を  
くやし涙で極限に挑戦しゆくことだ<sup>(2)</sup>

池田の言葉は、私に人生の指針を示し、生きる力を与えてくれた。また、同じ指針の元で、勇敢に人生の困難に挑戦する創価学会員の生き様は、つねに私を励ましてくれた。創価学会のなかでは、名もない庶民一人ひとりの生き様が「体験談」として赤裸々に語られる。病気、貧乏、さらには家庭のさまざまな問題に、それこそ「くやし涙で極限に挑戦」し抜いた人びとの体験は、この信仰のもつ力と同時に、まさに人間という存在のすばらしさを私に教えてくれた。

しかし、そうした私の信仰生活は、大学入学時に大きな転機を迎えたと思う。そのとき、はじめて私は、自身が創価学会の信仰を持っているという事実と意識的に向き合ったといつてよい。創価学会の活動のなかで人びとの体験に感動する一方、自身が信仰をもつということがどのような意味をもつかを、真剣に考えるようになった。その契機となったのは、社会科学的思考を本格的に学びはじめたことであった。

私に社会科学の面白さを最初に教えてくれたのは、大学の先輩や友人と行う読書会であった。参加者の多くは創価学会の学生部員であったが、その友人たちも頻繁に出入りしていた。その意味で、比較的自由な読書会であったと思う。関東大震災後に建てられたという古びた学生寮の隅

---

<sup>(1)</sup> 創価教育研究所編『池田思想研究への道』改訂版、第三文明社、2009年。

<sup>(2)</sup> 池田大作『青年の譜』読売新聞社、1972年、268頁。

で、週末の夜11時ごろにそれは始まった。開始がこのように遅いのは、すでに社会人となって働いている先輩の到着をまっていたからである。取り上げられた本は、鎌田慧のルポルタージュから、見田宗介、廣松渉などの社会科学系の書籍にひろがっていたと記憶している。そのなかで私は、社会の仕組みを解き明かしていく学問の魅力を知った。読書会での議論は、真夜中の会話という独自のテンションの高さも手伝ってか、毎回大いに盛り上がった。学んだばかりの事実・理論をもとに、社会をよりよくするために自分たちは何をなすべきか、を語り合っていた。

しかし、その高揚した議論なかで私を悩ませたのは、この社会科学の知見と池田の思想をどのように関係づけるかという問題だった。夜中の11時から始まる読書会は、深夜2時ごろからお酒が入り、議論はピークを迎える。そのあと朝まで飲んで語って、そのまま翌朝の創価学会の会合に出かけるということも、一度や二度ではなかったと思う。この夜中の読書会で学ぶ社会科学の知見と、朝から始まる創価学会の活動にある池田の指針を、私は上手く結びつけることはできなかった。幼いころから親しんできた創価学会の信仰に力があることは強く感じていた。しかし、そうした信仰も含めて社会の諸現象を客観的に分析していく社会科学の魅力を知るほどに、自身の信仰が揺らいでいく——少なくとも、これまでと同じ姿勢では続けられないと思うようになった。読書会の参加者には創価学会員が多かったので、議論はしばしばその方向に向くのだが、結局満足いく結論は得られず、いつも進んでいくのはお酒だけだった。そのようななかで、当時の自分にできたことは、とにかく、悩み考え続けることしかなかったと思う。社会科学の世界の中で池田の思想をどのように位置づけるか。創価学会の活動を続けながら、この問題はつねに頭の中にあった。

後になるが、私は、こうした問題は、自分だけが抱えていた問題ではないと知った。わが国の経済史研究の泰斗である大塚久雄は、キリスト教徒として内村鑑三の弟子でもある。その大塚は、「若い頃、唯物史観成立の土壌ともいえる経済史の研究をキリスト者である自分の生涯の仕事と定めるべきかどうか」を思い悩んだときに、内村から次のような助言を与えられたという。

君は神が真理であり給うことを信ずるだろう。学問における真理もまた神のものではないか。宗教的真理と学問的真理が対立し合うようにみえる場合があっても、神が真理であり給う限り、何時かは二つが必ず一つになるにちがいない。君もそれぐらいの信仰をもってやっていけるだろう。<sup>(3)</sup>

大塚は、この内村の言葉を「天来の啓示」であったと記している。信仰は異なるが、私にとっても、この言葉は強い示唆を与えてくれた。はじめてこの内村の言葉に接したとき、私は、自身が長く考え続けてきたのはまさにこの問題であると感じた。それは、私にとっても大いなる励ましの言葉であった。一時的に、池田、さらにはその基盤となる日蓮仏法が示す「宗教的真理」を、社会科学が教える「学問的真理」にうまく結びつけることができないとしても、「何時かは二つが必ず一つになるにちがいない」。だとすれば、「宗教的真理」と「学問的真理」の矛盾について、

<sup>(3)</sup> 大塚久雄『社会科学と信仰と』みすず書房、1994年、191-192頁。

これまで思い悩んできたこと、さらにこれから思索を深めていくことは、決して無駄ではないはずだ、と。

大塚久雄は、経済史、さらには社会科学全般の分野で、戦後の日本社会を代表する業績を残している。とくに、マックス・ヴェーバーの宗教社会学を媒介に展開された「資本主義の精神」の比較史的研究は、わが国の近代化の「人間的基礎」を探るといふ、強烈な問題意識に支えられていたことはよく知られている<sup>(4)</sup>。先に示された内村との交流は、こうした大塚の研究の根幹に、「宗教的真理」と「学問的真理」の矛盾に悩みながらも、真摯に続けられた学問的営為があったことを示しているだろう<sup>(5)</sup>。

ヴェーバーは、学問的研究は「それから出てくる結論がなにか『知るに値する』という意味で重要な事柄である」という前提が必要であると指摘している。しかし、「ある研究の成果が重要であるかどうかは、学問上の手段によっては論証しえない」。人びとは、「各自その生活上の究極の立場から」その研究が「知るに値する」かを判断する以外にない<sup>(6)</sup>。大塚にとって、わが国の近代化、さらにはその「人間的基礎」を探るといふ問題は、「宗教的真理」と「学問的真理」の対立に悩むキリスト教徒という「生活上の究極の立場」からみて「知るに値する」問題だったのではなかったか。

また、先の内村鑑三のことばが教えるのは、こうした学問に対する姿勢だけではない。むしろ、そこで強調されているのは、信仰者としての姿勢である。もし、キリスト教徒として「神が真理でありたもうことを信ずる」ならば、「宗教的真理」と「学問的真理」がいつかは「必ず一つになる」ことも信じなくてはならない。このような信仰があるからこそ考え続けられるのである。であるならば、「宗教的真理」と「学問的真理」の対立について思索を深めることは、強い信仰に支えられてはじめて可能になるだろう。信ずるものに何も疑問を抱かないことだけが真の信仰ではない。ここではむしろ、考え続けることこそが、信仰の証しとされている。内村の「君もそれぐらいの信仰をもってやっつけていけるだろう」という言葉は、まさにこの信仰者として考え続ける覚悟を問うている。

もちろん信仰である限り、その実践を怠ることはできない。そうした実践を伴わない思索は、傍観者の思索であって、信仰者の思索ではない。否、より正確に言えば、傍観者の思索というのはありえないのかもしれない。ヴェーバーによれば、学問は、各人のさまざまな「実際上の立場」は「これこれの究極上の根本的態度」、そうした意味での“信仰”から、「内的整合性をもって…導き出される」ことを示す。それによって、学問は、「各人に対して彼自身の行為の究極的な意

(4) 大塚久雄の学問と人生については、例えば、石崎津義男『大塚久雄 人と学問』みすず書房、2006年を参照。

(5) 「聖書だけから神を知ること」こそが「キリスト教の本質」であるという立場から、「聖書と社会科学の矛盾」に対する大塚の態度には、「異教的」な要素、信仰の「弱さ」があると批判されることもある（古河順一「大塚久雄」『日本の経済思想2』日本経済評論社、2006年）。「異教徒」である私に、この問題についてコメントする資格はないのかもしれない。しかし、少なくとも私は、そうした矛盾に常に立ち返りながら、真摯に研究を続けた大塚の姿勢には学ぶ点が多いと考えている。

(6) マックス・ウェーバー『職業としての学問』尾高邦雄訳、岩波文庫、1980年、43頁。

味について自ら責任を負うことを強いる」<sup>(7)</sup>。すなわち、学問は、各人が依って立つ究極的な価値観・信仰を自覚的に選び取り、その価値観・信仰に責任をもつことを求める。であるならば、価値観をもたない、もしくは自覚しない「傍観者」の思索などあり得ないだろう。私が、池田の思想を、日蓮の仏法を究極的な価値観として自ら選びとった以上、その信仰を実践によって深めていくことは当然である。そして、その信仰からみて「首尾一貫した」態度をとることを私は求められる。「特定の価値観をもたない」（そんなことは現実には不可能だ！）とうそぶくことが、学問をする者に求められる姿勢ではないはずだ。むしろ、自身の価値観・信仰を徹底して自覚することなしに、学問の研究はありえないことを、ヴェーバーの学問論は教えている。

もちろん、学問の理論研究自体は、自身の価値判断から独立して行われなければならない。ヴェーバーのいう「価値自由」の要請である。学問を行うとき、我々は、自身の価値観に囚われないうで、「精神を集中して冷静さを失わず、現実をあるがままに受けとめる能力、つまり事物と人間に対して距離を置いて見ること」が求められる<sup>(8)</sup>。もちろんこれは容易なことではない。信仰の実践を真摯に行う一方で、その信仰について距離を置いた、すなわち価値自由な態度での考察を続けることは、大きな精神的な緊張を伴う。とくに学問で導かれる結論と自分の信仰が矛盾する——ように見える——ときには、その緊張感は最高レベルに達する。しかし、学問をする者は、その緊張感に耐えねばならないと、ヴェーバーはいう。「都合のわるい事実、たとえば自分の党派にとって都合のわるい事実のようなものを承認する」<sup>(9)</sup> 知的誠実は、ヴェーバーがまず学問をする者の資質として求めるものである。一方で内村は、この信仰と学問研究の緊張感に耐えることを信仰者の資質として求めた。自ら選んだ信仰が正しいと信ずるなら、「それぐらいの信仰をもって」やっていかななくてはならない。

池田大作さらには日蓮仏法の思想と社会科学の知見を結びつけられずに悩んできた私に求められたのも、こうした学問をする者、また、信仰をもつ者としての態度であったのだろう。池田の思想と社会科学的な知見が、一見矛盾するようになって見えたとしても、それを冷静に受け止め、学問をする者として研究を続けなくてはならない。また、そうした矛盾があるようになって見えても、池田の思想が“正しい”のであれば、いつかはその矛盾が解けると信じて、信仰者として実践を続け、かつ考え続けなくてはならない。

答えがいつでともわからないまま、私はこの問題を考え続けていた。勉強をしても、創価学会の活動をしていても、いつも頭の片隅にはこの問題があったと思う。ようやく、そうした思索に一つの結論が出たのは、1995年に雑誌『潮』に連載されていた池田とゴルバチョフとの対談を読んでいたときだった。学生時代に思索を始めてから13年経て得た一つの結論だった。

(7) ウェーバー『職業としての学問』63-64頁。こうしたヴェーバーの「価値議論」の意義については、藤茂「科学と倫理：認識の意味」（徳永恂・厚東洋輔編『人間ヴェーバー』有斐閣、1995年所収）87-88頁も参照。

(8) マックス・ヴェーバー『職業としての政治』脇圭平訳、岩波文庫、1980年、77頁。

(9) ウェーバー『職業としての学問』53頁。

池田大作のいう「人間主義」は、一人ひとりの人間がもつ可能性の開花をすべての出発点にする——。そのとき気がついたのは、この単純な事実だった。しかし、その観点から池田の思想を読み返したとき、それまで親しんできた池田のさまざまな言葉が、別の輝きをもって迫ってきた。考えてみれば、池田はこのことを繰り返し語っていた。なぜ、10年以上も気がつかなかったのか。

この人間の可能性は、社会科学の用いるロゴスでは表現できないが、確かに存在する。それが池田の、そしてその依って立つ日蓮仏法の教えるところだった。また、それは何よりも、自分自身が、創価学会の実践の中で感じていた力だった。それは、しばしば宗教的言説で語られる「霊の力」などではない。矛盾に満ちた現実の生活の中で生ずる苦難を一つひとつ乗り越えていく具体的な人間の力だ。苦難にあきらめずに、「ただ一人 渾身の力で 現実を くやし涙で極限に挑戦しゆく」なかで、発揮される力だ。それはまた、創価学会の中で語られる「体験」のなかで語られる力でもある。創価学会員は、人間は誰もが大きな力・可能性を秘めており、またその力を自ら引き出しようと確信している。だから彼らは決して苦難に負けない。その確信を支えに、病氣、経済苦といった苦難に勇敢に立ち向かう姿勢に、また、それを乗り越えることで人間としての輝きを増していく姿に、私は感動する。その意味で、私にとって創価学会で語られる「体験談」は人間賛歌のドラマでもある。

もちろん、これは信仰の世界での話である。人間が秘めている力の存在、また、それを引き出す方途の有効性は、科学的に証明できるものではない。それは信仰の対象ではあっても、学問が扱う問題ではない。ヴェーバーがいう通り、「価値秩序の神々の争い」のなかで、「これらの神々を支配し、彼らの争いに決着をつけるのは運命であって、決して学問ではない」<sup>(10)</sup>。

学問が論ずべき問題は、池田の思想、日蓮仏法の信仰のなかで、科学・学問の役割がどのように位置づけられるかということだろう。この点については、すでに論じたので詳しくは繰り返さないが、ポイントは2つである<sup>(11)</sup>。一つは、池田にとっては、あくまでも一人ひとりが潜在的にもっている力を発揮していくことが出発点であり、理論が出発点ではないことである。逆に、理論を出発点として、万能な社会理論を求めることは、こうした人間の可能性を矮小化してしまう。なぜなら、理論が万能であるならば、人間は理論の指示に従うだけの駒のような存在になり、そこに創造性や責任感、さらには、人間が潜在的にもつ力を発揮する余地などなくなってしまうからだ。また、いま一つのポイントは、そのような創造性や責任感をもって行動する人間にとって、学問は役に立つということだ。学問は万能ではない。つまり、問題解決の方途を完璧に示すわけではない。しかし、人間が潜在的にもつ力を発揮しながら問題に立ち向かうとき、社会の仕組みを部分的にせよ解明する学問は、非常に有効である。一人ひとりの人間が、責任ある主体として問題に取り組み、具体的な知恵を発揮していくなかで、はじめて学問は役に立っていく<sup>(12)</sup>。

<sup>(10)</sup> ウェーバー『職業としての学問』54-55頁。

<sup>(11)</sup> 「人間主義を学ぶ人間主義を学ぶ——池田・ゴルバチョフ対談『二十世紀の精神の教訓』から」(『池田思想研究へ道』所収)

<sup>(12)</sup> ウェーバーもまた、自身の行動の結果に責任をもつ「責任倫理」に従う人格に、「目的とそのため不可

信仰を続けていけば、さまざまな問題に頭を悩ませるのは自然なことだろう。学生時代から私を悩ませた信仰と社会科学の関係は、そうした問題の一つである。私はこうした問題と真剣に向き合うことでしか信仰を続けることはできなかった。そして今でも、私は、信仰に関して答えが見つかっていない3つの問題を考え続けている。しかし一方で、その問題はいつか必ず“解ける”と強く信じている。

幸いなことに、私は、大学入学以来、信仰についての問題を率直に話し合える多くの機会を得てきた。信仰とさまざまな問題の間の葛藤に悩む私にとって、それらは実に貴重な場であった。そして、これからも信仰についての問題を考え続けていく私にとって、こうした人びととの繋がりは何者にも代えがたい財産となっている。

そうした繋がりを最初に与えてくれた学生寮の隅での読書会に参加してから、すでに四半世紀近い時間が経過した。あの深まる夜のなかで語り合った問題のすべてに結論が出たわけではもちろんない。しかし、今回『池田思想研究への道』に書かせて頂いた小論も、あの安酒を飲みながら語り合った濃密な時間がなければありえなかったことは間違いない。その意味で、このささやかな論考は、夜通し議論を戦わせた先輩、友人たちへの、現時点での私の精一杯の中間報告である。

---

避的な手段とのあいだの選択」(ヴェーバー『職業としての学問』62頁)を教えることに学問の役割を見出した。具体的な問題を解決するために知恵を働かせる人間がいてはじめて、学問の提供する知識は生かされるという池田の所説は、こうしたヴェーバーの立論に通ずるところがあるかもしれない。しかし、より立ち入った考察は今後の課題である。